

読賣新聞

子宮頸がんワクチンの接種後に重い副作用が現れている問題で、厚生労働省は積極的な勧奨を一時的に控えることにした。接種するかどうかを個人の判断に委ねた形だ。どう受け止め、どう対処すべきなのか。熊本大産科婦人科学の片瀧秀隆教授(57)に聞いた。

(大久保和哉)

効用と副作用 考慮し判断

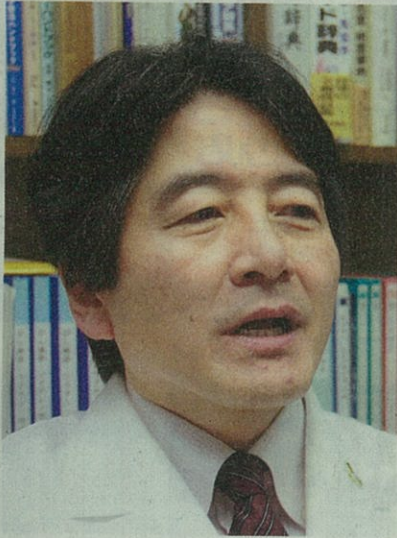
なぜ子宮頸がんは増えているのか。

「1990年代後半から若い女性を中心に急増している。性行為の経験年齢が若くなるなど、ライフスタイルの変化が一因だろう。今では20〜30歳の女性が発症するがんとしては、1位だ。女性の8割以上が性行為によって原因となるヒトパピローマウイルス(HPV)に感染し、ごく一部の人に感染が持続し発症につながる」

——ワクチンを接種するよ

時論まも

子宮頸がんワクチンの勧奨中止



熊本大産科婦人科学教授

かたぶち ひでたか 片瀧 秀隆さん 57

佐賀県鳥栖市出身。熊本大医学部卒業後、同大助手、講師、助教授を経て、2004年から現職。同大付属病院で長年、子宮頸がんなどの治療にあたる。日本産科婦人科学会理事、日本婦人科がん検診学会常務理事などを務めている。

「10歳代で感染し、感染が持続すれば、子どもを産む大切な時期である20、30歳代で発症する可能性がある。産婦人科医として、その年代で子宮を摘出した多くの悲しい事例を見てきた。『自分は発症しない』と安易に思わず、ワクチン接種や定期検診を真剣に考えてほしい」

うになった経緯は。「ワクチンで予防できるがんは子宮頸がんだけ。今年4月から、小学6年〜高校1年の女子に定期接種するようになった。すでに体内にあるHPVをワクチンで排除することはできないため、若い年代が選ばれた」

副作用の具体的な症状を説明してほしい。「腕がしびれ、脱力感を感じる人がいた。体が痛んで、歩くのが困難になる人もいた。重い副作用が出るのは、約2万5000回の接種につき1回の割合だ。欧米では日本と比較にならないぐらい接種されているが、副作用の報告は日本よりかなり少ない。

なぜ日本人だけ副作用が出る頻度が高いのか。原因が分かるまで、勧奨をやめるのはしかならない」

接種するかどうか、どう判断すべきか。「接種するのをやめるようにとやっているわけではない。欧米ではワクチン接種で子宮頸がんが7割少なくなる傾向にあるというデータがある。それだけ効果があるものをやめることはできない。効用と(副作用の)危険性の確率のどちらを大きくとらえるかによるだろう」

「副作用が怖いからワクチンを接種しない」という人は、子宮頸がんの背景にある性行為について家族内で話し合っしてほしい」

「ワクチンを接種したとしても、発症する可能性は残っている。ワクチンを接種して定期的に検診も受ければ、100%に近い確率で予防と早期発見ができる」

「若い世代へのメッセージを。」

「副作用が怖いからワクチンを接種しない」という人は、子宮頸がんの背景にある性行為について家族内で話し合っほしい」

子宮頸がん 子宮の出口付近(頸部)にできるがん。年間に1万5000〜1万8000人が発症し、約3500人が死亡している。性交渉で体内に入り込むヒトパピローマウイルス(HPV)に頸部が感

染し、感染状態が続けば数年から10年後に0・15%の確率で発症する。ワクチンは約150種類のHPVのうち、特に発がん性の高い2種類に効果がある。海外では100か国以上で接種されている。

「子宮頸がん検診だ。接種しないとするなら、必ず検診を受けて、がんの早期発見につなげてほしい。ただ、県内の20歳以上の女性の検診率は28%と低い」

「ワクチンを接種したとしても、発症する可能性は残っている。ワクチンを接種して定期的に検診も受ければ、100%に近い確率で予防と早期発見ができる」

「若い世代へのメッセージを。」